

毎日新聞 2012年12月16日 東京朝刊

(青太字は引用者によるものです。)

きょうの選挙はむずかしい。こうすれば歴史の歯車が回るという展望がない。高揚感がない。だが、この選択が明日の国会を決める。繁栄の果実を追い求めるのではなく、繁栄の土壌を問い直す人材を見抜き、議事堂へ送り出したい。

思えば前回は異常だった。政権交代への期待が大き過ぎた。交代で一件落着、万事解決と早トチリしてしまった。幻想を捨て、冷静な判断を取り戻さなければならない。

民主党は自民党政治の欠陥を鋭く突いて政権を奪ったが、経験不足で自滅した。

今回はどの世論調査も「自民圧勝」だ。過去10年、国政選挙の予測と結果はほぼ一致している。ただし今回の調査、自民党は小選挙区で強い半面、比例代表では勢いを欠いている。そこに有権者の迷いがのぞく。

自民党には伝統と地方組織がある。何ごとも風頼みで規律を欠く新興勢力とは違う。官僚排除の愚を犯す心配もない。だが、「だから任せて万事解決」と割り切れば、3年前とは裏返し早トチリになりかねない。

これは大震災後初めての総選挙であり、脱原発の行方は内外の注目の的だった。

脱原発と言うだけですめば世話はないという自民党の主張はもっともだ。キャッチフレーズを競い、独り合点の工程表をふりかざすだけの脱原発では意味がない—という批判にも同意する。

だが一方、結論は10年以内という自民党公約は、かつての「問題棚上げ・先送り」路線とどう違うのか。疑問をぬぐえない。

全国原発と青森県の再処理施設にたまった使用済み核燃料の中のウランは既に1・7万トン(10年末現在)にのぼる。広島型原爆を120万発つくれる量だそうだが、平和的再利用の展望なく、ゴミとして埋めさせてくれる場所もない。

**我々は核廃棄物の膨大な蓄積を抱え、退くも地獄、進むも地獄というジレンマに直面している。これほどの大事を棚上げし、明日の日本と地球の繁栄を探ることにどんな意味があるだろうか。**

産業経済、自治体、国際関係も揺るがす大問題だ。簡単に動かないのはしかたない。一方で、散漫と見えた選挙の原発論戦も無意味ということはない。

時あたかも師走。大地が力を蓄え直し、有機物をエネルギーに変えて翌年の恵みに備える季節だ。見えないところで何かがゆっくりと育つ冬。清き1票がそのようにはぐくまれることを願う。＝おわり